在天会員記念礼拝説教「涙の後に、恥の先に」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年10月18日

【旧約聖書日課】イザヤ書　25章1～9節

1 主よ、あなたはわたしの神
わたしはあなたをあがめ
御名に感謝をささげます。
あなたは驚くべき計画を成就された
遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
2 あなたは都を石塚とし
城壁のある町を瓦礫の山とし
異邦人の館を都から取り去られた。
永久に都が建て直されることはないであろう。
3 それゆえ、強い民もあなたを敬い
暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。
4 まことに、あなたは弱い者の砦
苦難に遭う貧しい者の砦
豪雨を逃れる避け所
暑さを避ける陰となられる。
暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨
5 乾ききった地の暑さのようだ。
あなたは雲の陰が暑さを和らげるように
異邦人の騒ぎを鎮め
暴虐な者たちの歌声を低くされる。
6 万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
7 主はこの山で
すべての民の顔を包んでいた布と
すべての国を覆っていた布を滅ぼし
8 死を永久に滅ぼしてくださる。
主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を
地上からぬぐい去ってくださる。
これは主が語られたことである。
9 その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。
わたしたちは待ち望んでいた。
この方がわたしたちを救ってくださる。
この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

【福音書日課】マタイによる福音書　5章1～12節

1イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。2そこで、イエスは口を開き、教えられた。

3 「心の貧しい人々は、幸いである、
　天の国はその人たちのものである。
4 悲しむ人々は、幸いである、
　その人たちは慰められる。
5 柔和な人々は、幸いである、
　その人たちは地を受け継ぐ。
6 義に飢え渇く人々は、幸いである、
　その人たちは満たされる。
7 憐れみ深い人々は、幸いである、
　その人たちは憐れみを受ける。
8 心の清い人々は、幸いである、
　その人たちは神を見る。
9 平和を実現する人々は、幸いである、
　その人たちは神の子と呼ばれる。
10 義のために迫害される人々は、幸いである、
　天の国はその人たちのものである。
11わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

山の上で【こども説教のために】

石神井教会の初代の牧師・石井忠善先生は、28 歳で石神井教会の牧師になり、36 歳で石神井教会の牧師のまま病気で亡くなられました。ちょうど 60 年前の 7 月のことです。ご葬儀が終わると、石井先生は、すぐに小平霊園にある共同墓地に葬られました。東京中の教会が共同で設けた大きなお墓です。けれども、石神井教会の人たちは、その翌年、石井先生のご遺骨を、小平霊園の墓地から別の霊園の墓地に葬り直しました。石神井教会の人たちが新しく設けた墓地です。石神井教会の人たちのための墓地です。最初に石井牧師を埋葬したその教会墓地に、今では 60 人近い方が葬られています。

そこで、毎年、墓前礼拝をしています。その墓地は、小高い丘の上にあります。見晴らしがよく、遠く山々を眺めることができ、また、町々を見下ろすことができます。わたしは、そこに行くたびに、主イエスが弟子たちを連れて登られた山の上も、そのようなところだったのではないかと想像するのです。毎日の生活の場を離れて、ぐるりと広がる空に包まれるところで、聖書を読み、讃美を歌うとき、いつもより少し神に近いところに居させていただけているような思いを与えられます。主イエスは、そのようなところにお連れくださったのではないかと思うのです。

今日、石神井教会は、すでに地上の生涯を終えられた方々を記念しています。その方々は、わたしたちよりも神に近いところ、「天の国」に招かれて、今も共に「神の子ら」とお呼びいただいていることでしょう。

「天の国はその人たちのもの」

毎年「在天会員記念礼拝」ごとに、「在天会員・教会墓地埋葬者・逝去者名簿」を更新してお配りしています。今年更新した名簿には 5 名を加え、170 名の方が名を連ねることになりました。新たに加えられた 5 名のうち最初のお一人は昨年の記念礼拝の前日に逝去されていた方、最後のお一人は、一昨日逝去されたばかりの方で、今晩教会堂にお迎えし、今週ご葬儀を執り行わせていただくことになっています。どなたも若き日に信仰生活を始められ、生涯をキリスト者として歩まれた方々です。もちろん、その生涯の歩みの中で、いつも教会に連なり続けることができていたとは限らないでしょう。長く教会から離れていらした方もあります。それでも、わたしたちは、どなたのことも等しく、ここに名を加えさせていただいています。

実のところ、この名簿には、信者ではない方の名も加えられています。信者であるご家族の願い出で、ここに加えさせていただいた方々です。その中には、教会が葬儀を執り行わせていただいた方もありますが、そうでない方もあります。それでも、願い出があれば、名を加えさせていただいてきました。これからも、そうするでしょう。わたしたちは、できれば、関わりのあるすべての方の名をここに加えて、記念させていただきたいのです。これを「天の国の命の名簿」として神の御前に提出させていただきたいのです。

主イエスは、弟子たちを連れて山に登られ、教えを語られました。「山上の説教」（マタイ 5～7 章）として知られる一連の教えです。その初めに、「幸いなるかな」と祝福されるべき人々を挙げてゆかれたのです。「**天の国はその人たちのものである**」と。

これは、いわば、「天の国の名簿」に数えられるべき人々のリストなのでしょう。そこに、個人の名は挙げられていません。しかし、一人ひとりの個人が忘れられているわけではありません。主イエスは、これを弟子たちに示されたとき、その背後に多くの人々を見据えていました。今は群衆にしか見えない人々を見ていらっしゃいました。その人々の中に、主イエスは弟子たちと共に出て行こうとされていました。いいえ、弟子たちをその人々の間に送り込もうとされていました。その一人一人を「天の国の名簿」に数えられるべき者として呼び、その名を記念するようになるためです。

記念すべきは、この世で名を挙げた者ではありません。霊性豊かな信仰者でもありません。誇るような信仰の持ち主ではない者。心の強さを持ち得ないような者。自分の正しさを主張できないような者。ただ、人のことを思い、神のことを思い、平和を願いながらも、世の中をうまく泳ぎ渡っていくことができないような者。そのような無名の一人一人を、主イエスは、「天の国の名簿」に数えられるべき者として呼び、記念するようにと言われるのです。

悲しむ人々は慰められる

土曜日の午後、ここで礼拝の準備をしていたところ、一人の青年が訪ねてきました。初めて見る顔でした。「キリスト教について聞きたいことがある」と言うのです。その青年は、最近、祖母様を亡くされて葬儀に参列して来られたのです。葬儀は、青森のカトリック教会で執り行われました。初めて葬儀ミサに参列されたのです。ご自身は信者ではないようで、プロテスタントとカトリックの違いも分かっていないようでした。けれども、祖母様の葬儀ということで、真摯に参列して来られたのでしょう。彼曰く、葬儀の中で司祭が「死は悲しみではない」ということを言われたのだけれども、それはどういう意味なのだろうかと疑問に思った、と言うのです。

確かに、教会は、「死」をただ悲しむべき現実としてだけ語るわけではありません。使徒パウロのように「**死ぬことは利益なのです**」（フィリピ 1:21）とまでは言えなくても、しばしば、「死は天国への凱旋行進である」と言ったりするのです。「死」が「天国」に入ることであるならば、それはひと時の別れという悲しみを伴うことだとしても、いずれすべての愛する者たちと再会するであろう「天国」に入ることは、喜ばしいことに違いないでしょう。

けれども、わたしたちの本音は、必ずしもそんなに素直で素朴なものではないかもしれません。だれにでも、「死んだ後、天国に行ってまで、あの人と再会したくない」というような相手が、一人や二人はいるものです。「天国で再会したくないから、墓は別々がよい」と大真面目に言うキリスト者の話を聞いたことがあります。

わたしたちは、どこかで「死」の悲しむべき現実を忘れているのかもしれません。「死」が本当は深く悲しむしかない現実であることを、見ようとしていないのかもしれません。悲しみに目を向けることを避け、悲しみに囚われて心乱されることを厭うのです。

「死」は、終わりです。別れです。断絶です。失われ、忘れられることです。その現実に目を向けるならば、わたしたちは、悲しまないわけにはいきません。悲しみを引き受け、悲しみに暮れないわけにはいきません。

けれども、そのような者に目を向け、傍らに立ってくれる者があるならば、そこには、新しい始まりがあるのです。新しい出会いがあり、断絶した関係の回復がある。失われたものを取り戻し、忘れられることのない名が刻まれるのです。

いにしえの預言者は、万軍の主なる神が山の上で開いてくださる祝宴の中に、その希望を告げました。主イエスは、山の上で弟子たちに、その幸いを教えました。ですから、教会は、主の山を見上げ、心を高くあげて、「天の国に数えられる命の名簿」を記念し続けるのです。